

# E-2:研究力分析とその活用

開催日時・会場 9月15日(水曜日) 13:50-15:20 WEB-ONLY

## 研究力分析業務でのコラボレーション

当セッションでは、URAのコラボレーション事例をもとに、研究力分析とその活用が実効性のあるものにするための有効なコラボレーションと環境整備について検討したい。

**招待講演** 技術経営を効果的にする人材像（東北大・工学 石田修一） 技術開発のさまざまなプロセスの中で、幾多の主要なキーマンが存在する。これまで、こうしたキーマンを同定し効果的に育成することについてはあまり焦点が当てられてこなかった。一方、技術経営における典型的な議論として「死の谷」や「ダーウィンの海」がある。これらは発明からイノベーション、ビジネスへの連結の不連続性と困難性を説いたもので、基礎科学から事業への長い道のりを、谷に落ちることなく（大海原を泳ぎきるために）どのようにマネジメントするかについての大きい問題提起であった。そして「死の谷」や「ダーウィンの海」においては、お互いに向き合った岸同士では、マネジメントのありかたのみならず、それを担う人材も全く異なっている。この死の谷やダーウィンの海を架橋するマネジメントのありかたについては、社会の技術経営に対する意識の高まりとともに、その重要性が認識されてきたが、逆にこうしたマネジメントを担う人材像についてはあまり明確な議論がなされていない。スタンフォードのJeffery Pfefferは、「人を中心に据えた戦略は組織の成功の原動力となり、利益獲得のチャンスも多く生み出す」と説明しているように、「技術経営を効果的にする人材」とは、まさしく技術戦略を効果的にする人材にほかならない。そこで今回、こうした技術開発における人材の同定並びに活用といった視点に主眼を置き、これまでの技術開発やイノベーションに関する諸理論を通じて「技術経営を効果的にする人材」像を捉えてみたいと思う。

**事例1** 研究力分析能力を磨きながらURA間の連携を深める（東北大・金研 湯本道明）：東北大URAの有志では、各URA業務能力向上と本部・部局URA間連携を目的として「研究力分析手法勉強会」（月1回程度）を開催している。URA業務効率化、高度化の取組みへと発展している勉強会の設立背景から現在の活動状況までと、見えてきた課題を紹介する。

**事例2** 研究力分析とその活用での有効なコラボレーションとは？（東北大URAセンターMarc Hansen）：部局と本部とともに本部内の各部署との連携も重要である。東北大URAセンターの研究力分析チームと関係部署（総長プロボスト室、研究推進課、国際企画課）の連携事例を紹介しながら、明らかになってきた可能性と課題について述べる。

**事例3** 部局・本部間での研究力分析結果の共有とその活用～研究力強化セミナー開催を例に～（東北大・生命科学 高橋さやか）：部局の研究力強化には、研究力分析結果を部局・本部が共有し研究力強化の戦略策定へと繋げることが重要である。本報告では本部URAの協力で開催した、部局の研究力アップのための講演会の事例を紹介する。

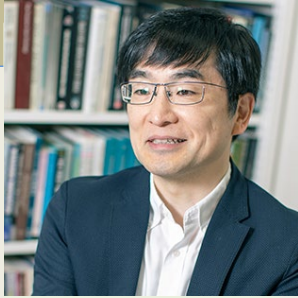
## オーガナイザー

### 莊司 弘樹：東北大学・URAセンター・首席URA(特任教授)



1992年東北大学大学院工学研究科博士後期課程を修了。東北大学工学部助手、助教授を経て、三菱総合研究所主任研究員、ICR・知的クラスター本部科学技術コーディネーター、宇都宮大学地域共生研究開発センター准教授を歴任。その後、東北大学電気通信研究所産学官連携推進室およびURAセンター特任教授に就任。先端科学技術の研究開発を行う機関を企業等に活用してもらうため、産学官連携活動に携わる。

## 講演者



石田 修一: 東北大学・工学研究科・教授

北海道大学大学院経済学研究科および京都大学大学院工学研究科の博士後期課程修了。博士（経営学）、博士（工学）。専門は技術経営、経営システム。ソニー株式会社、日本学術振興会特別研究員、北海学園大学経営学部助教授、立命館大学大学院テクノロジー・マネジメント研究科教授を経て現職。この間、ケンブリッジ大学セントエドムンズカレッジ客員フェローを兼務。

湯本 道明: 東北大学・金属材料研究所・  
首席URA(特任教授)

NO  
PHOTO  
AVAILABLE

静岡大学卒業、熊本大学大学院にて修士（理学）及び博士（理学）を取得。大学院修了後は、主に独立行政法人や国立研究開発法人、行政機関に従事し、2014年11月より東北大学金属材料研究所のURAとしての活動を開始。

Marc Hansen: 東北大学・研究推進・支援機構・  
URAセンター・URA(特任助教)



ドイツ生まれ。トリーア大学第二学部日文学科修士課程修了。卒業後は日独間における政治教育プログラムに携わり、それを機に2009年来日。以来ドイツ語講師として秋田大学および東北大学で授業を担当。2011年以降は東北大学国際交流課にて国際交流オフィサーとして勤務（兼任）。2014年4月東北大学研究推進・支援機構URAセンター着任。本センターでは主に研究力分析を担当しているが、国際戦略室の業務にも携わっている。

高橋 さやか: 東北大学・生命科学研究所・  
URA(特任助教)



宮城大学卒業。東北大学大学院にて植物生理学の研究で博士号取得（生命科学）。2014年より現職。2017年には米国国務省「VLP "Women in STEM"」に参加。現在は主に部局の研究力分析や広報業務、ダイバーシティの推進等に携わっている。